ドクター・ケニヤ奮戦記

アフリカの日本人医師の診療日誌

佐伯文一

ドクター・ケニヤ奮戦記
アフリカの日本人医師の診療日誌
佐伯文太郎（さえきぶんたろう）
昭和48年4月30日　1刷
定価六八〇円
発行者　小野田　政
編集者　塩田　廣八
印刷　大日本印刷株式会社
製本　株式会社昇栄社
発行所　サンケイ新聞社出版局
東京・千代田区神田錦町三の一五梅屋ビル（101）
大阪・北区梅田町二七（530）
乱丁・落丁本はおとりかえします
© 佐伯文太郎　1973 Printed in Japan
〈検印省略〉
0095-073780-2756

ドクター・ケニヤ奮戦記

アフリカの日本人医師の診療日誌

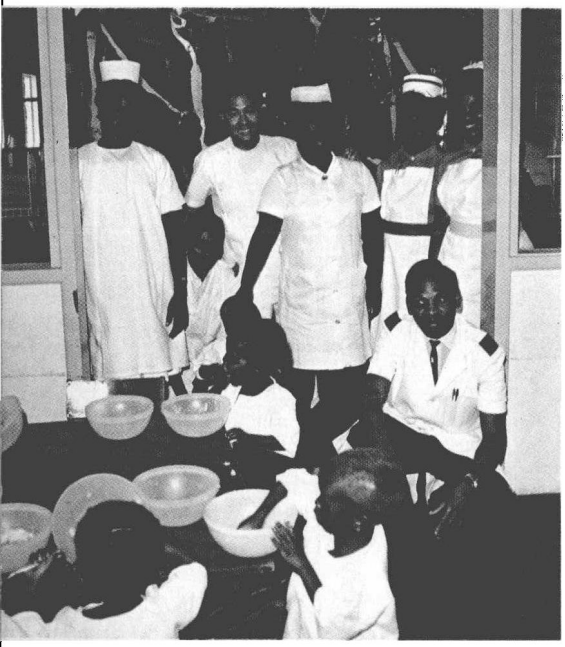
佐伯文太郎

小児病棟：栄養失調や小児湿疹の赤ちゃんが多いが、母親たちにとって入院させてもらえることはなによりもうれしいことなのだ。

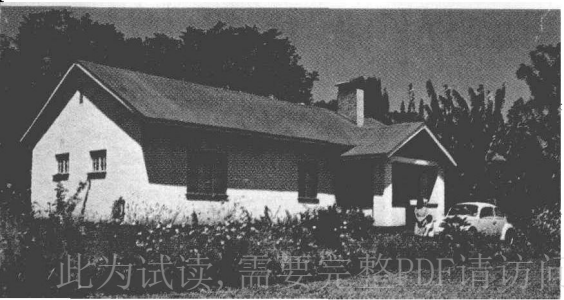
アフリカ第一歩：ケニヤに着いた日の午後、ナイロビ市内を散歩してみた　意外に美しい町の姿に慰せられ、ニュースタンレー・ホテル前で家族揃って記念撮影　この数日後から、泥まみれのエンブ生活が始まり、私は8キロもやせることになる。

雪を頂くケニヤ山：キリマンジャロに次ぐ、アフリカ第2の高峰で、標高5199メートル。エンブの町はその山麓の少し東南にある。幅広い裾野には野獣が多く、象、サイ、キリン、バファロー、ヒョウなどがすんでいる。

ただいま手術中：午前9時、2例目の手術にとりかかる。この日は8例もあって大繁盛、スタッフ一同も張り切る。助手のジャクソン医介補はめっきり手術がうまくなったが、日本だったら、さしずめニセ医者事件でとりあげられるところであろう。



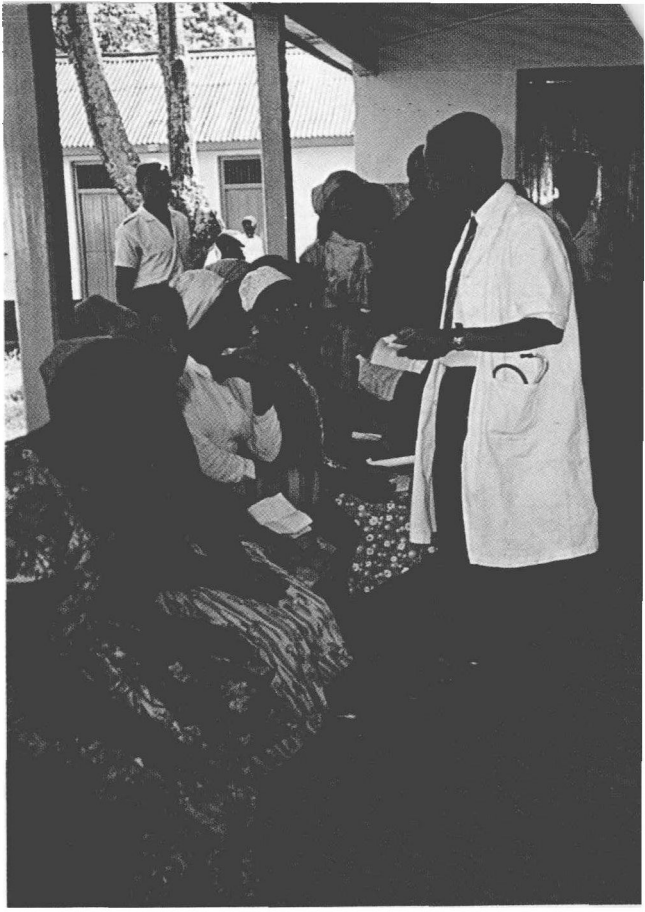
小児病棟のクリスマス：入院児の大半がひどい栄養失調で、頭髪が薄く茶色いのはクワシオコールと呼ぶ栄養障碍児である。クリスマスといってもツリーが飾られるだけのささやかなものだが、子供たちは大喜び。給食は骨付き牛肉、ジャガイモ、キャベツのごった煮で、指で丸めて口の中に放りこんでみると、塩味が効いていてとても美味い。私(著者・中央)のケニヤ焼けも板についてきた。



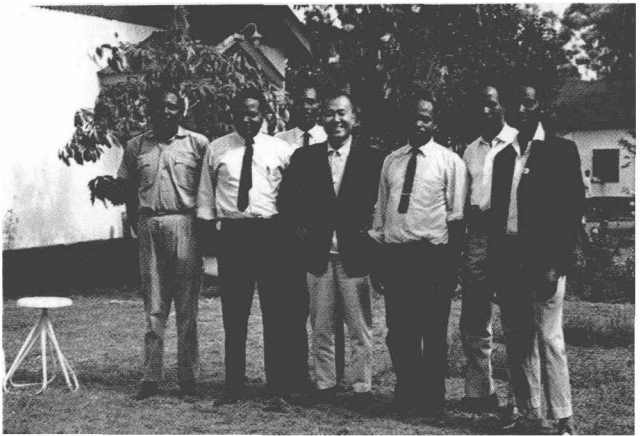
エンブの我が家：初めの頃は背丈ほどの雑草にとり囲まれたお化け屋敷だった官舎だが、まもなくジャカランダ、ハイビスカス、ブーゲンビリヤ、バナナ、パパイヤ、それに多くの草花と野菜、おまけにリス、カメレオン、小鳥たちに囲まれた楽園になった。ときどき毒蛇とサファリ・アンツが現われ、ヒョウが顔を出すのがタマにキズ。

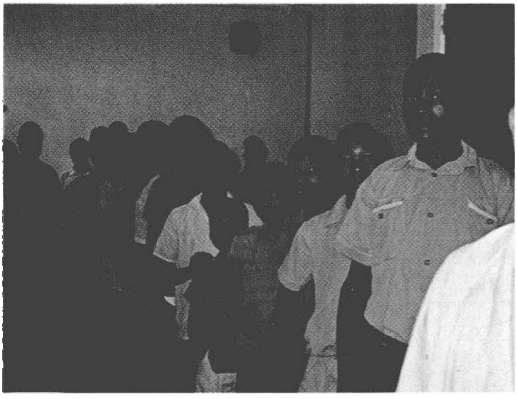
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

外来待合室：注射とかレントゲンなど、特別に何かがお目あてで来院する患者が多い。そういう連中は、折角貰ったクスリは惜しげもなく溝に捨ててしまう。思い通りの手当てを受けるまでは何がなんでもねばり抜くぞ、と終日、何度でも再診の列に並ぶのだ。 →



エンブ特別機動隊：外科のメンバーはいかなる緊急事態にも敏速に対処する。愛称で呼んでみると、左から順に、ギプス係のジャゲ（エンブ族）、医介補麻酔師のローレンス（エンブ族）、看護夫のフランシス（キクユ族）、ドクター・サエキ（日本人）、手術室主任看護夫のパトリック（ワカンバ族）、医介補のアントン（ルオー族）、私の秘書で運搬係のジル（エンブ族）。





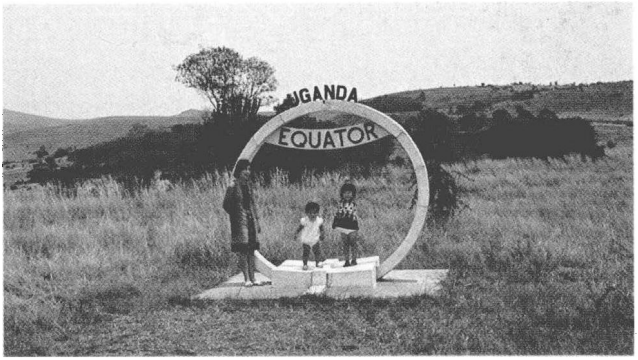
外来広場：午後4時を過ぎると外来の広場もひっそりしてくる。このはだしの美少女は、恋人に面会にやって来た。ちょっとからかってやると、黒い頬を赤く染めた。

割礼を待つ少年たち：クリスマスの休暇は割礼のシーズンである。割礼は神聖な行事である……といっても自宅の土間で汚れたナイフをもってするのは好ましくない。ケニヤ政府が病院での清潔な割礼をすすめるので、エンブ病院も希望する少年たちで混雑するようになった。

エンブの青空市場——1
：天気の良い日は地面の上に衣料を並べて売る。鮮やかな原色の衣切れには「made in Japan」とある。

独立記念日のお祭り：エンブのお祭り広場には、イースタン州の各地区から人々が集まる。それぞれ自分たちの部族衣裳に身を飾り、お国自慢の踊りを披露してくれる。

エンブの青空市場——2：水・土曜日はエンブ青空マーケットの市日である。この日はエンブ病院の外来患者の数が少なくなる。週に2回のレクリエーションのひとときなのだ。商品の売れ行きなどは二のつぎで、楽しい社交の場として人々は集まってくる。



赤道直下にて：ウガンダ国、クイーン・エリザベス国立公園。赤道の標識は正確に緯度0度に立っている。しかし、ここは高原である。カラッとした空気、冷たい風……とても赤道下とは思えない。

ドロガバ：ウガンダ国、クイーン・エリザベス国立公園。ほとんど水気がなくて乾上ったようなドロの沼があった。沼の表面がいやにデコボコしているなと思っていたところ、突然いっせいに、むくむくと動きだした。おどろいたことに、それはカバの群であった。

序にかえて

大阪大学総長
釜洞　醇太郎

日本人も逞しくなったものだ。これが私の読後感である。これは白人文化の洗礼を受けたアフリカの原地社会、インド人と黒人の交錯する小都会に飛び込んだ日本人青年外科医の奮闘の記録である。一昔前に読んだ伊藤博一氏のトングロード以来の感銘である。

内容の大部分はエンブというケニヤの小都会の病院における記録であるが、文明社会では想像もつかぬ病気や出来事が踵を接して登場する。夜となく昼となくスワヒリ語と英語を駆使して大活躍する様が克明に描き出され、読む者をして手に汗をにぎらせる。その間に挿入されている人生観、社会観は各層の読者に対して大きな啓蒙であり、また反省の資

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

料となるであろう。特に医師のモラルというものについて、これほど深く考えさせられるものが他にあろうか。医師、医学生にとっては必読の書である。

著者の闊達な文章は、世界地図にはないようなエンブの町を描いて、アフリカの真の姿をわれわれ日本人に身近なものとさせた。同じアフリカでも、黒人の殆んどいないアラブの町カイロしか知らぬ私にとっては、驚異であった。またエンブの人達は今までに殆んど見たこともない日本人の飾り気のない人間味に、この上ない親しみを感じたであろう。同時に日本人医師の優秀さに一驚を喫したであろう。これは、当たりまえである。著者はもとより、ここに登場する医師達は日本でも堂々たる大家なのである。

しばしば出てくる中村博士はドイツで深く研究した元刀根山病院の副院長であり、吉永博士は現大阪大学医療技術短期大学の主事で、現在ドイツの大学で客員教授として内科学を講義しているのである。この二人の内科の先生が渺たるエンブの病院では、婦人科の帝王切開までやってのけるのである。まさに医学の原点にまで立ち戻っているというべきであろう。

周囲をスーダン、エチオピヤ、ウガンダ、ソマリヤ、タンザニヤ、インド洋にかこまれ、ナイルの奥深くビクトリヤ湖と秀麗キリマンジャロを控えた猛獣の国ケニヤは、著者によれば、

「ケニヤは美しく平和な国だ。それにくらべれば大阪の町などは全く無法のジャングルというべきだろう。ルールを無視して争う車の群れは、ケニヤの猛獣たちよりよほど恐ろしい。猛獣といえども、身の危険を感じない限り人に危害を加えるものではない。エゴに狂った人間よりは、はるかに安全だ。

自然界の掟は日本国憲法のような頼りないものではない。それに従うのは忍耐を要するが、自然の流れにさからわぬ限り、調和ある安息が約束されている」

著者の文明批判の一端である。ともあれ極端な粗食に甘んじ、再三の危険をはらんだ最悪の環境下で、原地住民に愛の手を差し延べ、全幅の信頼をかち得た一日本人の行動は、広くわれわれ日本人に、深い感動と感謝の念を呼び起こすものと信ずる。

目次

序にかえて　大阪大学総長　釜洞醇太郎　9

I

ジャンボ・ダキターリ（こんにちは・ドクター）　17

素晴しいケニヤ
暗闇の訪問者
エンブ初の日本医師
涙の死体解剖
ケニヤ山麓マーケット

II

ドクター・サキエの大奮戦　58

ジョセフの馬鹿と悪党ミシェク

ワンブギ一家の悲願
エンブの証言台
奇跡の手術台
奇妙な強姦事件

Ⅲ ケニヤのモラル 113
恐怖のマラリヤ
ある日の回診
波紋を投げた自動車事故
泥まみれのサファリ・ラリー
黒い肌のお巡りさん

Ⅳ エンブの自然とロマン 148
ケニヤの日本人

ナイロビの魅惑
深夜の帝王切開
ナイル川のドライブ
自殺を企てた女

V

クワヘリ（さよなら）・ケニヤ 201
毒矢殺人事件
マサイ部族の誇り
死をみつめる子供たち
クリスマスの割礼
野獣の襲撃
最後の当直医
あとがき 248

カバー・口絵写真・佐伯文太郎

ドクター・ケニヤ奮戦記

アフリカの日本人医師の診療日誌

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.